

活 動 報 告

共同研究グループ活動報告（2015 年度）

日中関係史研究会

本年度は長らく研究会代表を務めた大里浩秋氏が定年退職したことに伴い代表を山口建治に交代した出発であった。以下、本年度に開催された研究会の日時を箇条書きで記す。

(1) 研究会

報告：「鍾馗の伝来ルート—オコ（打夜胡）来朝」
山口建治（本学外国語学部教授）

日時：5月26日（火）午後4：30～5：30

場所：17号館216号室（人文学研究所資料室）

(2) 研究会（共催）

テーマ：「脱冷戦期の中国・台湾における日本語ラジオ放送——プロパガンダからの転換——」

司会：村井寛志（神奈川大学）

報告1「日中国交回復後のラジオペキン——プロパガンダからの転換——」中村達雄（フリーランス、元北京放送局）

報告2「中華民国の対外・対日放送の変遷、および転換期となった1990年代の現場風景」
本田善彦（フリーランス、元中国広播公司・海外部）

コメンテーター：本田親史（神奈川大学非常勤講師）

日時7月8日（水）18：00開始

場所横浜キャンパス20号館4階417A

共催：神奈川大学人文学研究所、人文学会、「帝国とナショナリズムの言説空間」、「日中関係史」共同研究グループ

(3) 研究会

報告：「習近平政権と日中関係について」朱建栄氏（東洋学園大学教授）

日時：2015年6月25日（木）14：40～16：10

場所：3号館地下102号室

（文責 山口建治）

色彩と文化Ⅳ

1. 論文

(1) 三星宗雄

「回想のカトマンズ」

『神奈川大学人文学研究所報』54, 15-51.

(2) 尹亭仁

「ソウルの言語景観——英語・日本語・中国語の表記を中心に」

『神奈川大学『人文研究』187, 1-36.

(3) 彭国躍

「近代上海多言語景観の類型分析——アイデンティティ表示の多様性」（執筆中）

2. 海外調査

(1) 尹亭仁 ソウルの言語景観の調査、ソウル、2015年7月30日～8月1日

(2) 尹亭仁、中国（上海）におけるJAPAN BRAND（JAPAN COLORを含む）に関するデータ収集、2016年1月22日～25日

（文責 尹亭仁）

言語変異研究

1. 研究内容：言語と社会の関係に関する総合的な研究、今年度は主に歴史的言語景観に関する調査研究を行った。

2. 調査研究の主なテーマ：

(1) 「上海南京路言語景観の百年変遷」

(2) 「上海の都市形成期における言語景観」

(3) 「上海言語景観の百年間の変容——“大世界”の事例研究」

3. 研究所蔵資料の収集：

『近世中国映像資料』（14冊）黄山書社2012

『The Changing Chinese: The Conflict of Oriental and Western Cultures in China』

NEW YORK: THE CENTURY CO. 1912

『甲午：120年前の西方媒体観察』三联书店

2015

4. 2016 年度も引き続き歴史言語景観について調査する予定である。

(文責 彭国躍)

プランゲ文庫研究会

本年度は、プランゲ文庫の二期にわたる学内共同研究が終わったこともあり、一年間、とくに大きな研究会を開催することはできなかったが、研究会メンバーの尹健次氏（神奈川大学名誉教授）により「在日」の精神史の全3巻『1 渡日・解放・分断の記憶』、『2 三つの国家のはざまで』、『3 アイデンティティの揺らぎ』（岩波書店、2015年）が刊行されたことは特筆しておきたい。

神奈川大学図書館に所蔵されている貴重文献「プランゲ文庫」を起点にしつつ、第二次大戦終了後の東アジアにおける民族主義の歴史体験とその意味を軸とするより幅広い、深度のある研究を目指す、という研究計画に沿って来年以降も活動を継続したい。

(文責 孫安石)

活字文化の研究

1. 講演会・研究会の開催：

2015 年 11 月 7 日（土）

横浜市読書活動推進月間応援イベント「紙つなげ！フォーラム」参加。

- ① 講演会：「欧米における日本のイメージ」（神奈川大学外国語学部国際文化交流学部准教授 ステファン・ブッヘンベルグ氏）
② 体験会：「帯作り体験コーナー」

※その他、適宜、メンバー間での情報共有を行った

2. シンポジウムの開催：特になし

3. 活動内容

- (1) 活字を通じた日本語教育と異文化理解（国際）に関する調査・研究
(2) 活字文化普及のための教育・啓発活動（教育）に関する調査・研究

(文責 松本安生)

〈身体〉とジェンダー

◆本年度は、計画通り、本研究会に叢書刊行の予算が採択されたことを受け、各メンバーが成果をまとめて執筆する運びとなった。

◆叢書のタイトルは『〈68 年〉の性——変容する社会と「わたし」の身体』（青弓社）となり、各メンバー担当の章タイトルは以下のようになった。

第 1 章 幽閉されるアメリカン・ヒロイン——19 世紀末から 1960 年代へ（山口ヨシ子）

第 2 章 誰の〈身体〉か？——アメリカの福祉権運動と性と生殖をめぐる政治（土屋和代）

第 3 章 スウィング・シックスティーズの脱神話化——アンジェラ・カーターの『ラブ』（村井まや子）

第 4 章 身体の「自律」から「関係」の身体へ——アニエス・ヴァルダ『歌う女、歌わない女』をめぐる（熊谷謙介）

第 5 章 女性性の戦略的表象——アンナ・オPPERマンの「アンサンブル・アート」と〈68 年〉の身体（小松原）

第 6 章 1960 年代日本の女性運動家の実情とイメージ——白土三平のマルクス主義的長編漫画『カムイ伝』を題材に（クリスチャン・ラットクリフ）

◆執筆に向けての互いの問題意識を再度確認し、より一層まとまりある叢書内容にするため、下記の日程で研究会も実施した。

第 1 回研究会（7 月 21 日）発表者：土屋和代「誰の〈身体〉か？——米国における福祉権運動と性と生殖をめぐる政治」

第 2 回研究会（10 月 6 日）発表者：熊谷謙介「身体の「自律」から「関係」の身体へ——アニエス・ヴァルダ『歌う女、歌わない女』をめぐる」

第 3 回研究会（11 月 3 日）発表者：小松原「女性性の戦略的表象——アンナ・オPPERマンの「アンサンブル・アート」と〈68 年〉の身体」

(文責 小松原由理)

自然観の東西比較

1. 講演会・研究会の開催

2015年度の研究計画についての打合せ

開催日：2015年4月24日（金）

内 容：2015年度共同研究奨励助成金申請・支出計画書（「自然観の東西比較研究」）の確認、研究目的・研究計画の再確認（東洋絵画の研究に関しては、「自然観を基礎とした文化の東西比較研究コレクション」のなかに中国美術についてのコレクションが含まれており、研究資料として利用できることを確認）、「研究組織・研究概念図」の追加・訂正、各自の調査旅行予定の確認（予算の確認）、研究会の年度計画（毎月第3水曜日とする）、講演会の予定

第1回研究会

開催日：2015年5月20日（水）

場 所：17-216

報告者：上原雅文

テーマ：「東西の「基層的自然観」とその変遷の概観」

第2回研究会

開催日：2015年6月17日（水）

場 所：17-216

報告者：鳥越輝昭

テーマ：奪い返す「自然」と抗う想像力——ピラネージのローマ廃墟画を中心に——

第3回研究会

開催日：2015年7月15日（水）

場 所：17-216

報告者：伊坂青司

テーマ：(1) 風土論の系譜——哲学的視点から——

(2) 三陸気仙沼「森は海の恋人」運動の視察報告

第4回研究会

開催日：2015年9月30日（水）

場 所：17-216

報告者：村井まや子

テーマ：「蛇，鳥，女——非変身譚としての川上弘美『蛇を踏む』——」

第5回研究会

開催日：2015年10月28日（水）

場 所：17-216

報告者：坪井雅史

テーマ：近代捕鯨にみる自然と経済——日本における小型沿岸商業捕鯨の現状を考える——

第6回研究会

開催日：2016年1月27日（水）

場 所：17-216

報告者：山本信太郎

テーマ：宗教改革期ウェールズの自然と景観

第1回講演会（予定）

開催日：2016年2月24日（水）

場 所：17-215

講演者：廣瀬友久（大妻女子大学教授）

テーマ：イギリス・ロマン主義の自然観と風景画

3. シンポジウムの開催計画

なし

4. 活動報告

本共同研究グループは、今年度、神奈川大学共同研究奨励助成金（「自然観の東西比較研究」）に採択された研究グループである。4月に、当助成金申請の際に提出した申請書・支出計画書に基づいて研究打合せを行い、各自の調査旅行と定例研究会および講演会の開催計画を立てた。結果として、定例研究会、国内外の調査旅行、国際学会の発表など、ほぼ予定通りに活動できた。研究会の内容は、思想（基層的自然観、風土論）、絵画（風景画）、物語、景観、環境倫理（森と海）、生命倫理（捕鯨）などに関する研究報告・調査報告であり、毎回、活発な質疑応答と議論が交わされた。

（文責 上原雅文）

近代都市の表象

1. 共同研究グループ名称：近代都市の表象

2. 講演会・研究会の開催

「〈身体〉とジェンダー」研究グループとの協同により「都市・身体表象の生成とその変容」を主題とする合同講演会・研究会を開催している。同グループの記載と重複するだろうが、開催は以下のとおりである。

研究会：5月26日（火）

以後の研究計画・出版計画について打ち合わせ

講演会：6月23日（火）

講師：石川真知子

論題：「死を賭して「男」に変身する妹——家族規範を攪乱する女性の物語として再解釈する『兄妹心中』音頭——」

研究会：7月21日（火）

発表者：土屋和代

論題：「誰の〈身体〉か？——米国における福祉権運動と性と生殖をめぐる政治」

研究会：10月6日（火）

発表者：熊谷謙介

論題：「身体の「自律」から「関係」の身体へ——アニエス・ヴァルダ『歌う女、歌わない女』をめぐって」

研究会：11月3日（火）

発表者：小松原由理

論題：「女性性の戦略的表象——アンナ・オッパーマンの「アンサンブル・アート」と〈68年〉の身体」

研究会：12月1日（火）

発表者：鳥越輝昭

論題：「『恋愛専科』のなかの〈ローマ〉のことなど——保守化最終段階としての1962年——」

3. シンポジウムの開催計画

なし

4. 活動内容

近代の東洋・西洋の諸都市の来し方や現況について、表象という切り口から分析を試みている。今年度中に人文学研究叢書を出版することを

目標にしている。

（文責 鳥越輝昭）

ヒト身体の文化的起源

1. 活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討した。

I 特に関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点について調査・研究を進めた。研究内容は2015年9月の第70回日本体力医学会（和歌山市）で「アキレス腱が曲がるワケ」と題する一般発表を行った。

II アキレス腱の機能的意義を調べる一貫として、2015年11月下旬にカリフォルニア大学サンディエゴ校医学部を訪問し、腱組織を描出する超短エコー時間イメージングによる撮影を行った。

（文責 衣笠竜太）

「帝国とナショナリズムの言説空間」

1. 研究会の開催

第1回：日程：2015年7月22日（水）

午後4：00～6：00

場所：17-401号室

（横浜キャンパス・人間科学部
社会コース共同研究室）

講師：梅崎かほり（本学外国語学部助教）

発表論題：「モラレス政権下のボリビアにおける「ネーション」の生成」

第2回：2015年12月19日（土）

午後2：30～5：00

場所：17-401号室

（横浜キャンパス・人間科学部
社会コース共同研究室）

講師：小馬徹氏（本学人間科学部教授）

発表論題：「トライバリズムと／の地

方分権化：ケニア新憲法公布によるナショナリズムの急展開」

第3回（予定）：日程：2016年3月24日（木）

午後2：00～4：30

場所：神奈川大学ひらつかキャンパス 11号館第1会議室

講師：イ・ミョンソク氏（成均館大学国政管理大学院教授）

発表論題：「新しい社会問題解決方法としてのネットワークガバナンス：理論的議論と韓国の経験」

逐次通訳：久田和孝氏（神奈川大学外国語学部准教授）

討論者：米野みちよ氏（フィリピン大学アジア研究センター准教授）

泉水英計氏（神奈川大学経営学部教授）

司会：高城玲氏（神奈川大学経営学部准教授）

2. 活動内容

昨年度に採択された神奈川大学共同奨励研究助成金「帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携の総合的研究」と同時並行で進めている共同研究グループである。

（文責 永野善子）

NCH 新聞研究会

本研究会は、神奈川大学が所蔵するNCH（North China Herald）新聞（ONLINE版）の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究を目指している。本年度は共同研究会の開催は実現できなかったが、研究会のメンバーである孫安石が（株）雄松堂の冊子の中に「『The North China Herald』を読む——中国と日本、そして東アジア研究のための宝庫」という短文を紹介した他、2015年12月4日に開催された第55回『良友』画報研究会において、「NCHのなかの『良友』画報」というテーマの報告を行った（<http://liangyou.jugem.jp/>を参照）。

また、2016年2月19日（金曜日）と20日（土曜日）に神戸学院大学にて開催される第56回

News Collection を推薦します

推薦します

『The North China Herald』を読む——中国と日本、そして東アジア研究のための宝庫
神奈川大学外国語学部中国語学教授 孫 安石

戦前期に中国で刊行された多くの英字新聞の中で、The North China Herald and Supreme Court & Consular Gazette（以下、The North China Heraldと記す）は、最も長期に亘って発行された新聞であり、その記事内容は上海と中国に止まらず、日本と朝鮮半島、さらに東南アジアを包括するものであることから、同新聞は東アジアの歴史研究のための「宝庫」と言えよう。同紙に、雑誌のThe Far Eastern Review: Commerce, Engineering, Financeを加えれば、我々は欧米の人が東アジアで営んでいた日本の政治と経済、そして社会と文化活動に関与するものたちのかき加えを見ることができよう。但し、多くの場合、The North China Heraldの利用には、言語の壁の他に一部の図書館にしか所蔵されていないというアクセス面のハードルを越えなければならなかったが、ここに来てThe North China Heraldを含む合計12種類の英字新聞の横断検索が可能になったProQuest Historical Newspapers: Chinese Newspapers Collectionが登場したのである。

また、日本ではThe North China Heraldが上海で発行された欧米系の新聞のなかで「反日」的な論調を展開した代表的な新聞の一つとして取り上げられることが多いが、同新聞が最も重視していたのは、欧米諸国が安定した世界の利益を守ることにあったことを忘れてはならない。

その典型例が、袁世凱の国民革命軍が北京の軍閥政府打倒を目指した1917年の軍事行動（北伐）と1928年の清室善後と共に関与した日清戦役と関係する民衆の論議である。1928年4月14日の記事「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」や同日の風刺漫画を渡れば、同紙が最も重視したのは、国民革命軍の「正義」や「徳義」の「統一」という理想ではなく、国民革命軍が排外主義をとなす「内乱」の生命と財産を保護することを約束した、という善い名義の表明であったことがよくわかる。

▲1928年4月14日 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

▲1928年4月14日 Sapejou 画 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

私にとってもう一つThe North China Heraldをめぐる楽しみとしては、1923年から同紙の政治風刺画を担当した上海の偉大な漫画家「Sapejou」（中国名：羅伯蘭）の作品に出会うことである。

ロシア革命を経て1920年に上海に到着したSapejouは、The North China HeraldとThe North China Daily Newsに出政風刺のイラストの連載をもち、長いオチで当時の中国と政治諷刺。そして日本が対立する国際政治を風刺する優れた作品を数多く手懸けに描き残されている。

今期のProQuest Historical Newspapers: Chinese Newspapers Collectionの登場によって、一人でも多くの研究者と学生が中国と日本、そして東アジア研究のための「宝庫」に出会うことを切に願いたい。

▲1928年4月14日 Sapejou 画 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

▲1928年4月14日 Sapejou 画 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

▲1928年4月14日 Sapejou 画 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

▲1928年4月14日 Sapejou 画 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

▲1928年4月14日 Sapejou 画 The North China Heraldの「Manifesto by General Chiang Kai-shek to the Powers」の新聞記事のスクリーンショット。中国語と英語の両方で記載されている。

『良友』画報研究会においてもNCHを取り上げた二つの報告——(1)「North China Heraldと日本人」（仮）藤田拓之、(2)「North China Heraldと『良友』画報」（仮）孫安石（神奈川大学）が行われる予定である（<http://liangyou.jugem.jp/>を参照）。

（文責 孫安石）

「声の文化」

今年度は以下の日時に第一回の研究会を開催予定である。

日時：2016年1月20日（水）17：00～

場所：17-216（人文学研究所資料室）

報告者：吉川良和氏（本学非常勤講師、元一橋大学教授）

題目：「旧加賀藩の盆踊り唄——東アジアの目連伝承——」

また、上記の報告終了後、本研究会の各メンバーの研究課題を説明し、研究会の今後の活動予定について話し合う。

（文責 村井まや子）

講演会要旨

1. 開催日 2015 年 11 月 6 日
2. 会場 13-B113
3. 講演者 小川哲也先生（東京大学大学院総合文化研究科）
4. 演題 歩行と走行を実現する中枢神経機構

ヒトの歩行と走行はともに、左右の下肢三関節（股、膝、足）の屈曲―伸展の繰り返しによって実現し、したがって、使用する筋も大部分が共有される。一方で、移動運動に関わる神経制御機構について調べると、例えば動物研究では、同じ筋を使用する運動（ゼブラフィッシュの泳ぎ、マウスのステッピング、など）も運動モードごとに異なる神経細胞群が関与することが近年明らかとなってきた。このような結果を参照すると、ヒトの歩行や走行も単に速度が異なるというだけでなく、中枢神経系はそれぞれを全く別個の運動として制御している可能性があると考えられた。そこで、筆者らは特殊な力学的環境下の歩行と走行に生じる学習効果に着目した行動科学的検証を行った。

トレッドミル上での通常の歩行や走行時では左右の下肢は対称に近い力発揮をするが、左右 2 枚のベルトが別々の速度で動作する変則的な条件下で一定時間歩行または走行すると、課された条件下でスムーズな歩行や走行を実現するための学習が成立する。歩行で成立した学習は、その後の通常歩行における下肢の力発揮が非対称となる運動パターンを発現させ、走行を学習するとその後の通常走行が非対称となる学習効果が顕在化する。一方で、これらの学習効果は歩行、走行間ではほとんど共有されなかった。すなわち、歩行と走行の運動記憶はそれぞれ独立で起こり、この結果は、下肢の共通した筋の運動により実現するヒトの歩行と走行も、その神経制御機構はそれぞれに個別に存在する可能性を示すものである。従って、中枢神経系は歩行と走行を単に速度の違う運動としてではなく、別々の運動として制御していることが明らかとなった。このような基礎研究で得られた結果は、スポーツやリハビリなどのトレーニング場面を想定すると、少なくとも神経科学の立場からすれば、歩行のトレーニングでは走行のパフォーマンス向上は見込めず、また走行をトレーニングしても歩行のパフォーマンスが向上しないことを意味している。

本研究会では、歩行や走行を実現する基礎的な神経機構の紹介に始まり、前述したこれらの研究の方法や結果を詳細に紹介する。

（文責 笹川俊）

1. 開催日 2015 年 11 月 2 日（月）
2. 会場 17 号館 317 室
3. 講演者 千野裕子氏
4. 演題 下北沢というトポス——「小劇場演劇」の現場から——

深澤担当の「日本芸能論 B」では、中世に興った「能楽」について講義している。しかし古典芸能としての「能楽」へのアプローチは、現代の若者たちにとって、かなり至難の業である。そこで本講義では、補助線として近現代の演劇の歴史をまず概説し、それらの知識を前提に、それらとの「比較」の中で、古典芸能としての「能楽」の特質を明らかにしていくという迂路を採っている。その意図をさらに明確化するために、演劇の現場で、いままさに活躍中の新劇の「俳優」をゲスト講師に招き、その生の声を学生たちに聞かせた。

今回ゲスト講師として招いた千野裕子氏は、学習院大学で日本古典文学の研鑽をつみ、その知識・教養を生かして、自ら劇団「貴社の記者は汽車で帰社」を組織し、そのシナリオライター兼主演女優として年二回の公演活動を主導するとともに、NHK の大河ドラマを始めとして、テレビや映画にしばしば出演している新進気鋭の現役の女優である。この千野氏を招いて、今現在の演劇やドラマ作りの現場体験を、あれこれお聞きすることで、「日本芸能論 B」の科目の趣旨が、より一層学生たちに理解され、それとの比較の中で能楽へのアプローチの一助となったものと思料する。

講演内容は、自己の演劇活動の紹介を踏まえつつ、日本における近代演劇（いわゆる「新劇」）の成り立ちの歴史をまず概説していただいた。そして本講演の主要テーマである、「小劇場演劇」のメッカともいべき下北沢の街に散在する小劇場の運営形態や、各々の小劇団の内情などに至るまで、微に入り細に入り、パワーポイントの画面を使って分かりやすく説明していただいた。今現在のホットな話題ということもあって、受講学生は食い入るように耳をそばだてて聞いていた。また講演終了後の意見交換の場でも、積極的な質問が飛び交った。

（文責 深澤徹）

文 献 解 題

Audot Père (ed.), *L'Italie, la Sicile, les Iles Éoliennes, l'Île d'Elbe, la Sardaigne, Malte, L'Île de Calypso etc.*, 2 vols., Paris: Audot, 1834-1837.

本書は、パリで出版社を経営するとともに地理学者でもあった大オド（Audot Père）が編纂したイタリア百科である。1834～1837 年にかけて出版された。本来は全 6 部 3 巻の構成だが、2 巻と 3 巻は合本されている。今回研究所に所蔵されたのは、第 1 巻目である（2016 年 1 月現在）。各頁 2 段組による印刷。第 1 巻目の各部が扱うのは、第 1 部がトスカーナ地方で、全 114 頁。第 2 部がヴェネツィア、ミラノ、ロンバルド＝ヴェネト王国、周辺諸国で、全 108 頁。第 3 部がピエモンテ、サルデーニャ島、シンプロンで、全 180 頁である。全体にわたり、挿絵として、イタリア現地で入手したという多数の鮮明な銅版画を収録している。

本書はイタリアについて全貌を紹介することを目的としたもので、地理的にはマルタ島などもふくめてイタリア全域を、歴史的には古代ローマから当代まで、分野も、景観・地勢・政治・経済・建築・人性・風俗など万般を取り上げている。各巻ごとに執筆者を立てて、現地を観察記述するとともに、ラテン語・フランス語・ドイツ語・英語によってイタリアを紹介した古今の文献を博搜・選別して記述に織り込んであり、広範・綿密で充実したイタリア紹介となっている。

本書は、国家統一がなされる以前の小国分立状態のイタリア（これが西ローマ帝国崩壊以後 1300 年間の常態だった）、そして鉄道網など近代文明が広がる以前のイタリアを全体的に詳述してあって、貴重な史料である。銅版挿絵も、当時の様子を視覚的に伝えて貴重である。

（文責 鳥越輝昭）

『中国皮影戲全集』（全 24 冊）

魏力群主編，文物出版社 2015 年 11 月

中国の人形劇のうち影絵芝居（皮影戲）の全容を概観するのに好都合な資料集成である。その源流、演出、歌唱、脚本、造型、彫刻、芸人、民俗、文論など、中国各地の皮影戲のほぼ全体を総合的に理解することができる、資料集成になっている。とくに、約 20 年にわたって 25 の省市 170 余りの県の 2000 名ほどの皮影職人と関連人士を視察・訪問し、大量の視察ノートと調査アンケートを蓄積して、大量の関連資料を参照して研究を進めた成果とされており、きわめて貴重な資料集である。

日本の人形劇は中国から伝わったと考えられており、その起源や発展、様式などを考究する上で大いに参考になる。

（文責 山口建治）

所 員 自 著 紹 介

1. 『占領空間のなかの文学 痕跡・寓意・差異』
2. 日高昭二
3. 岩波書店
4. 2015年1月20日発行
5. 292ページ

本書は、第二次大戦後におけるアメリカによる占領の記憶を文学テキストのなかにたどったものである。第一部「占領空間」の文学は、占領期の諸問題として浮上した政治犯釈放、新憲法発布、特殊慰安施設（RAA）、検閲、朝鮮戦争、イーグル旋風、人民裁判、公職追放、警察予備隊、再軍備などを時系列に沿って論じ、またGHQによるホテルや劇場の接收、MPの活動、日本語のローマ字化、混血児、戦争花嫁などを、まさに「占領」に伴うさまざまな「物語」として追跡している。

第二部「帝国」への視野」では、戦時中に南方に「徴用」された井伏鱒二と、「江戸」に留学していたという石川淳の二人をとりあげ、それぞれの「帝国」をめぐる記憶と表象のゆくえを追っている。また第三部「占領」への通路」では、まず「座談会」における言説の諸相を渉猟し、このとき人々は何を語っていたかに焦点を合わせた。次いで松川事件、チャタレイ裁判、「風流夢譚」事件など、占領期に顕現した事件とその後を射程に収めつつ、それが現在にどう及んでいるかについて論じている。さらに「付」として「占領期「検閲」論・略史」を掲げて、このところ話題になっている「検閲」の研究史を素描している。

まさしく戦後七〇年を迎えたこの年、いまだに生成変化してやまない歴史の母体の一つであるとも言えるべき「占領空間」は、その確かな痕跡をたどり直すことによって、改めて文学表象の意味を再認・想起する契機になれば、という強い思いで上梓されたものである。

（日高昭二）

1. 書名：*State and Finance in the Philippines, 1898-1941: The Mismanagement of an American Colony*
2. 著者：Yoshiko Nagano
3. 出版社：Ateneo de Manila University Press (Philippines); National University of Singapore Press (Singapore)
4. 出版年月：フィリピン版：2015年2月、シンガポール版：2015年5月
5. 頁数：248頁

本書は、アメリカ植民地期における近代的銀行業の展開過程を念頭におきながら、第一次世界大戦直後にフィリピンを襲った金融危機の全容を解明すべく、アメリカのフィリピン統治体制の特質をも視野に入れたうえで包括的議論を展開する試みである。本書を編むにあたって筆者が一貫して志したことは、従来の研究で「第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄」という枠組で捉えられてきた一連の事象が、じつは「第一次世界大戦直後のフィリピン金融危機」として理解すべきであるということ、一次資料を渉猟しつつ実証することにある。

「第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄」として社会通念化してきた「第一次世界大戦直後のフィリピン金融危機」は、アメリカ植民地期フィリピン統治体制の根幹に関わる重大問題であった。一九一九～二二年のフィリピン金融危機のひとつの原因がフィリピン国立銀行経営をめぐる政官財の腐敗した癒着構造にあるとすれば、もうひとつの原因は、ワシントンの米国陸軍省島嶼地域担当局が立案した、金本位基金と銀証券準備の通貨準備危機への統合という、金為替本位制の維持に相反する政策の導入にあった。したがって、一九一九～二二年のフィリピン金融危機があくまで「金融危機」としてフィリピン社会で公にされれば、フィリピン立法議会に対してアメリカ

人行政官に対する批判を展開する格好の材料を与えることになりかねない。それはアメリカ政府のフィリピン植民地経営の基盤を揺るがす事態に発展する可能性をもはらんでいたのである。

(永野善子)

1. 『ワーキングガールのアメリカ 大衆恋愛小説の文化史』
2. 山口ヨシ子
3. 彩流社
4. 2015年10月31日発行
5. 192ページ

本書は、前書『ダイムノヴェルのアメリカ 大衆小説の文化史』（二〇一三年、彩流社）の最終章「ワーキングガールから遺産相続人へ ローラ・ジーン・リビーの恋愛小説をめぐる」に続く研究として、「ワーキングガール」の物語を分析したものである。「ワーキングガール」とは、南北戦争後のアメリカで労働現場に大挙駆りだされた若い未婚の白人女性労働者のことである。彼女たちは、性差別が横行する製造工場などで長時間労働を強いられながらも生きるために必要な最低賃金さえ支払われないという過酷な状況下におかれていた。

南北戦争後、労働市場への女性の参入が記録的に増えた理由は、戦争によって失われた労働力を補充する役目を女性が担う必要があったことに加えて、製造過程における機械化が進んだことで、それまで男性が専門的訓練を受けて担っていた仕事が無経験の女性にもできるようになったためである。十九世紀後半のアメリカでは、ワーキングガールの大量出現が、社会の顕著な現象として認識されるようになったのである。

このような社会現象は、出版業界にも大きな影響を与えることになった。長時間の単純労働に従事していた若い女性労働者をターゲットとする文学が興隆したのである。若い女性労働者をおもな読者とする読物が、ニューヨークを中心とする大衆小説出版界の人気商品となり、スター作家も誕生するにいたっている。とくにローラ・ジーン・リビーは、貧しいワーキングガールのヒロインが

金持ちのハンサムな男性と結ばれる恋愛小説を書いて人気を博し、「プロレタリアートの女予言師」という異名を獲得するにいたっている。

社会の底辺で過酷な人生に直面していた若い女性労働者に人気を博したリビーのワーキングガールの物語は、どのような特徴をもち、どのような先行作品の影響を受けて生みだされたのか。リビーの恋愛小説は、ワーキングガールにどのように読まれたか。とくに英語を母語としない「移民」の少女たちにはいかなる意味をもっていたのか。セオドア・ドライサーの『シスター・キャリー』など、二十世紀の文学史で正典とみなされた作品にもワーキングガールが登場するが、それらとリビーらのワーキングガールの物語にはどのような類似や差異がみられるのか。本書は、貧しい女性労働者が愛読したワーキングガールをヒロインとする読物をめぐるこれらの問題を明らかにしようとするものである。

(山口ヨシ子)

1. 書名：『ラテンアメリカ 1968 年論』
2. 著者：小倉英敏
3. 出版社：新泉社
4. 出版年月：2015 年 11 月 15 日
5. ページ数：403 頁

近年、新興諸国や途上諸国において「新中間層」とくに「新中間下層」の増加現象が見られ、今後の世界経済の行方は、この「新中間下層」が定着し、さらに発展できるかどうかにかかっているとの議論も聞かれる。他方、先進諸国においては、「新自由主義」経済モデルの下で非正規労働者が増加するなど中間層の下方分解が生じて貧困層に転落する傾向も生じている。2015 年には中国経済の減速が顕著になり、世界経済の中短期的な見通しに不安要素も見られるようになっていくが、各国ともに経済成長の回復・維持のために「中間層」対策を重視した政策をとる傾向にある。

先進諸国においては主に 1960 年代に、戦後経済復興の延長線上で達成された経済成長の結果として「中間層」の増加現象が生じ、これを背景として 1968 年に「中間層」の若者たちによる『若

者の叛乱』とも呼ばれた現象が生じた。

このような「中間層」の動向は、先進諸国においてのみ生じたわけではなく、周辺・途上地域においても、大規模な「街頭騒動」の形はとらなかったものの、「中間層」と主役とした種々の社会現象が発生した。しかし、「1968年論」を展開している論者たちの視野に入っているのは先進資本主義諸国であり、周辺・途上諸国にも共通した現象があったことに関する検証はあまり見られない。

ラテンアメリカにおいては、「街頭騒動」が発生したメキシコをはじめ、「変革」志向の軍事クーデターが発生したペルーとパナマ、一部知識人の体制離反がおきかけたキューバ、人民連合政権成立に向けた政治変動が生じたチリなど、ラテンアメリカ諸国でも1968年には「中間層」の動向を背景とした種々の現象が見られた。

本書は、これらの現象を「世界システム」の過程の中で生じた出来事と捉え、グローバル・ヒストリーの再編成の作業の中に位置づけなおすことを目指した。

(小倉英敬)

ときに使われることが推定された。

一方、「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」の違いによって、目の前に聞き手がいる「対話モード」においては、両言語の文脈指示詞的用法も異なる振る舞いを示している。日本語の場合には、話し手の発話によって聞き手の言語文脈領域にコピーされた談話指示子とその属性情報は、談話セッションが終わってしかるべき時間が経過した後、共有知識領域へ転送されることになる。ただし、しかるべき時間が経過していなければ、聞き手の共有知識領域に談話指示子とその属性情報が転送されず、もちろんそれにアクセスすることもできない。このため、聞き手は自分の言語文脈領域にコピーされた談話指示子とその属性情報をデフォルトのソで指すほかない。その一方、中国語では時間とは関係なく、聞き手の言語文脈領域に新たに登録された談話指示子とその属性情報は、直ちにその共有知識領域にも転送される。したがって、聞き手はいつでもそれを利用できるため、「这」を用いることができると考えられる。

(劉羈)

1. 書名 『談話空間における文脈指示』
2. 著者 劉羈
3. 出版社 京都大学学術出版会
4. 出版年月 2015年2月
5. ページ数 174頁

本研究は日本語と中国語の文脈指示詞の「コ・ソ」、「这・那」に関する問題の解決に向けて、「語りのモード」「情報伝達モード」および「対話モード」の観点から考察を行った。その結果、「語りのモード」と「情報伝達モード」では両言語の文脈指示的用法はよく似ていることが判明した。具体的には、ソと「那」は話し手が自分のみ保有している属性情報を利用せず、聞き手との共通の言語文脈領域に登録済みの談話指示子に新たな属性情報をアップデートするために用いられる。コと「这」は、話し手が情報の占有者として談話を構成している場合、自らの共有知識領域に予め格納されたより豊かな属性情報を利用しながら、言語文脈領域に登録された談話指示子を指す